

自己認識が居住地区選択に与える影響*

An impact of self cognition on residential location choice*

中居良行**・青木俊明***

By Yoshiyuki NAKAI**・Toshiaki AOKI***

1.はじめに

これまでの居住地選択モデル¹⁾²⁾では、アクセシビリティ(時間・距離)、地価、住宅タイプ・世帯タイプなどを主要因とし、個人の経済条件に適合した居住地選択が想定されている。しかし、実際の居住地選択では、街並み、人間関係、雰囲気、景観など、居住地環境の質的特性を考慮して選択を行っていることも少なくないと思われる。そのため、これら物理的な要因のみで居住地選択を説明することには限界があると思われる。例えば、近郊の高級住宅地への立地は、アクセシビリティの悪さ、利便性の低さを考えれば、物理的要因のみで説明することは難しいことが分かる。そのため、居住地選択には居住地区の質的特性が影響していると考えられる。従って、図-1に示すように、居住地選択の意思決定機構を考える際には、物理的要因以外の要因についても考慮する必要があると言える。そこで本研究では、非物理的要因が居住地選択においてどのように作用しているのかについて検討を行う。

2.自己認識の重要性

社会心理学では意思決定の際に、自己認識が重要な役割を果たすことが知られている³⁾。自己認識(自分自身に対する認識)とは「自分は なる人間である」という意識である。自己に対する認識はそれ以外の認識に比べ、接近可能性が高く、さまざまな判断に影響を与える³⁾。このことより、あらゆる選択・判断の意思決定の際に、自己認識は影響があると言える。従って、居住地区選択においても同様に自己

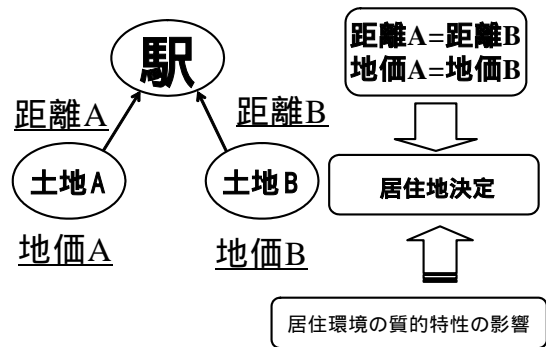


図-1 物理的要因と質的特性の作用の模式図

認識は作用していると考えられる。

3.プロトタイプマッチング戦略とは

「車の購入」、「職業の選択」、「学校の進路」など、選択の際には、自己認識と選択対象物の認識は密接に繋がっていることが報告されている³⁾。これらの報告によれば、人は自己認識と選択対象に対して持っている認識を対比させた上で、意思決定を行っているという。すなわち、自己認識と選択対象に対する認識の相関が最も大きいものを選択している。この考えをプロトタイプマッチング(以下、PM)という⁴⁾。

PMが用いられる理由として、選択の際に費やす認知的負荷が小さくなり、認知的不協和の回避にもつながることが挙げられる。さらにPMが作用すると、自分が選択した対象物が自己認識を反映しやすいものになるため、選択判断後でも自己認識を維持しやすくなる。

4.既存研究におけるプロトタイプマッチングの効果

Niedenthal⁴⁾らは、住居形態の選択を題材にして、PMの有効性を検討している。実験では、自己認識と7つの住居形態(アパート、一戸建、学生寮など)

*Keywords : 地域計画、住宅立地

**学生員、東北工業大学大学院 工学研究科 土木工学専攻 (宮城県仙台市太白区八木山香澄町 35 番 1 号,staypunk@smail.toitech.ac.jp)

***正会員、博(情)、東北工業大学建設システム工学

の居住者に対するイメージについて、新居を探している学生に評定させた。その際、PM の個人差を性格特性^{注1}とセルフモニタリング^{注2}に着目し調べた。

その結果、性格特性が多く、セルフモニタリングが低い人に、PM が用いられやすいことが認められた。しかし、選択目的が経済条件重視の場合には、PM の作用頻度が低いことが認められた。これは、選択者の PM の作用には個人差があり、自己認識の明確な選択者ほど、PM が強く作用していることを示唆している。

5. 研究仮説

居住地区選択を行う際、居住地区も住居形態と同様に選択対象になるため、自己認識と選択対象物の認識には密接な関係があると考えられる。したがって、PM は居住地区の選定においても作用していると考えられる。

Niedenthal らに従えば、性格特性が多く、セルフモニタリングの低い選択者は、居住地区選定の際に自己認識に一致する雰囲気や人間関係など、居住地区の質的特性を重視するため、質的特性を第一に考えると思われる。次に経済条件を考え、自己認識と一致した居住地区内で経済条件に見合う場合に立地すると考えられる。一方、性格特性が少なく、セルフモニタリングの高い選択者は、居住地区選定の前に経済条件、立地条件などを重視するため、経済条件を第一に考える。次に経済条件、立地条件内で自己認識に近い質的特性を持った居住地区の中に立地すると考えられる。これらをまとめれば図-2 に示すような選択のプロセスになる。

これらのことを踏まえ研究仮説を考えると、居住地区選択において、質的特性・経済条件のどちらを重視しても PM は作用すると思われる。

また、居住地選択における PM の作用には、選択者の居住地区に関する情報（知識、経験、関心など）が強く影響すると考える。このことは、居住地区と選択者の間に、情報の共通性が多い程、PM は強く作用すると思われるからである。したがって、PM が弱く作用する被験者は、選択に関する情報が少ないと考えられる。

ところで、同じ居住地区を選択した選択者同士は、類似した特性を持つ地区を選択するため、自己認識

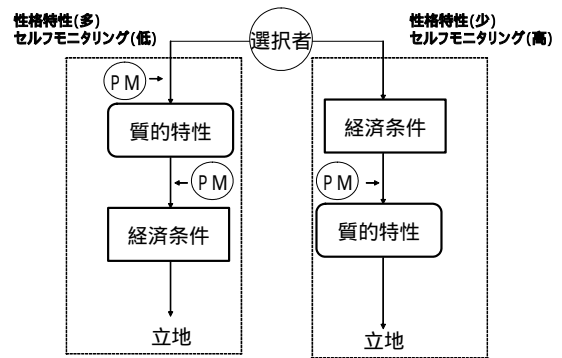


図-2 プロトタイプマッチングの作用の模式図

が類似している可能性が高い。そのため、自己認識が類似した選択者が選んだ居住地区は、特定の質的特性を形成すると思われる。したがって地区の雰囲気などの形成においても、PM は影響を及ぼしていると考えられる。

6. 調査方法

調査はアンケート調査を予定している。アンケート配布方法は、訪問配布・訪問回収で行う。対象地区は地区特性が異なる都心地区、近郊一般住宅地区、近郊高級住宅地区、農山村地区の4カ所における一戸建住宅を予定している。調査結果については、当日に紹介する予定である。

注1：性格特性

性格の特徴において一貫して見られる行動傾向。個性。

注2：セルフモニタリング

自己の内的現実と外装的な装いの落差の程度を観察すること。

参考文献

- 1) 宮本和明・安藤淳・清水英範：非集計行動分析に基づく都市圏住宅需要モデル，土木学会論文集，第365号/ -4，pp.79-88，1986.
- 2) 林良嗣・富田安夫：マイクロシミュレーションとランダム効用モデルを応用した世帯のライフサイクル-住宅立地-人口属性構成予測モデル，土木学会論文集，第395号/ -9，pp85-94，1988.
- 3) 山本真理子・外山みどり：社会的認知，誠信書房，1998.
- 4) P.M.Niedenthal Prototype Matching: A strategy for Social Decision making, Journal of Personality and Social Psychology, vol48, No.3, 575-584,1985.